



030

After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

「経験」というたからもの。

一つひとつの経験が、いつか自分自身の力になる。

そう信じて歩き続ける。自分で選んだ道だから。

演劇学科 3年

佐藤 玲さん



■ 5大学の学生による共同制作に参加

今年9月、池袋の東京芸術劇場シアターアイーストにて、演劇の実践教育を行っている都内5大学の学生たちによる共同制作『わが町』が上演された。参加した大学は日本大学、桜美林大学、多摩美術大学、桐朋学園大学、玉川大学。今春、この5大学により東京演劇大学連盟が結成された。第1回目となる今回の公演ではそれぞれの大学からオーディション



で選ばれたキャスト・スタッフ計44名が集結し、一つの作品を作り上げた。

演出は本学の桐山知也先生が担当。日藝からは佐藤玲を含めた4名のキャスト、3名のスタッフが参加。現代演劇の原点でもあるこの奥深い戯曲において、佐藤は主要な役どころエミリーの母親役を見事に演じあげた。「桜美林大学は身体表現が強い、などそれぞれにカラーの違う大学の学生が刺激しあいながら、一つのものを作ることに興味があり、また桐山先生の演出する舞台に再度参加したいと思い、オーディションに参加しました。今回、『わが町』の舞台制作に参加してみて、舞台の中で行われる身体表現や音響に関しては他大学の先生のワークショップが開かれたり、東京芸術劇場のご協力のもとRADA*の元講師にアレキサンダーテクニークを学んだりと、普段できない経験をすることができました。*

*ロンドンにある王立演劇学校

■ みんなで考えながら、舞台を作る

佐藤は自らを「負けず嫌い」だという。東京育ちの彼女は小学校5年の時、オーディションを受ける機会を得た。当時、芸能プロダクションに入っていなかった佐藤は、途中で落ちて悔しい思いをした。それがきっかけで、演技の勉強をしようと決意。中学3年の時に新劇の舞台を中心に活動する『演劇集団アクト青山』に所属した。オーディション後に日藝の存在を知り、同劇団で受験の準備を開始。中学生にして女優の道に進むことを決めた彼女は、日藝に入ることを夢見て、演技の勉強を続けたのである。そしてAO入試〈日藝オーディション〉で念願の合格を果たした。

大学に入って初めての舞台は、2年の舞台総合実習で制作した『月の岬』という作品だった。「キャストもスタッフもすべて学生。舞台の構成というものをみんなで一から考えながら作るというのは初めての経験だったので、とても勉強になりました。演出は『わが町』と同様、桐山先生でしたが、作品の構成員として自分はどんな役割を担っているのか、また観客からはどう見えるか…。キャストは主観的に物事を捉えがちですが、客観的に俯瞰して自分の役割を見つめることを学びました。」

■ 「今」しかできないことを

日藝で勉強する傍ら、三浦友和さんや佐藤浩市さんなどのベテランが顔をそろえる芸能プロダクションに所属。また、昨年からは彩の国さいたま芸術劇場芸術監督・蜷川幸雄氏が率いる若手演劇集団〈さいたまネクスト・シアター〉の団員になり、女優としての経験を一つひとつ重ねている。「プロダクションでは映像の仕事、さいたまネクスト・シアターでは舞台を中心にネクスト公演だけでなく、大竹しのぶさん、藤原達也さんが出演した『日の浦姫物語』に参加させていただきました。私はやりたいことは迷わずポンとやるタイプ。大学時代はある意味、猶予期間でもあるので、これからもいろいろなことに挑戦したいですね。『わが町』で演じた母親役は、40代位の設定。「だめよ、そんな食べ方は！」と子供を叱るシーンを練習している時、口調が母親にそっくりだと思ったという。「その時、演技は未体験の事柄でも自分の経験則から生まれてくるものなのだと感じました。今まで容姿などからも自分の年齢より下の役が多く、前回の舞台では9歳の少女を演じましたが、今後はいろいろな年齢のいろいろな境遇の役が演じられるよう経験を積みたいです。」たとえば、友人や家族と喧嘩をした時、佐藤はその時の気持ちを大切にしまっておきたいと思うのである。泣く演技一つにしても様々な段階や方向性、表現方法があり、映像と舞台の泣き方に大きな違いがある。佐藤は今、自分を見つめ直すことや、外からの刺激を一つずつ大切にして演技の幅を広げようとしている。

日藝に入りたいという夢をかなえ、様々な経験を重ねながら女優への道を自らの手で切り拓いてきた佐藤は、これからも自分の手で新たな道を切り拓いていくだろう。舞台の上で誰よりも輝いている彼女を見て、そんな気がした。

● 一つひとつの経験を「演技」の糧に。



美術学科 4年

仮屋 真二さん



■ 学んできたことを、新たな分野で生かしたい

大学生活もあとわずか。すでに就職先も決まり、あとは卒業制作の作品づくりを残すだけとなった。仮屋真二の就職先は障害者支援施設や児童養護施設など、幅広い福祉施設を運営する社会福祉法人。当初2年間は施設での仕事を通して養護・介護の知識を身につけ、将来的には児童養護施設で子供たちに絵や工作を教える指導員になりたいと夢をふくらませている。

大学1・2年の時に油絵、3年から版画を学び、美術教師の免許を取るために母校である熊本県の芸術系の高校に教育実習にも行った。そんな彼がなぜ、美術とは一見無関係な「福祉」という分野に興味を持ったのだろうか。

「就職活動をはじめた頃は、印刷関係の企業、デザイン会社などを受けることも考えていました。そんな時、企業説明会で就職先の社会福祉法人の方に話を聞いたら、障害を持つ子供たちのカリキュラムの一つとして、絵や木版画を取り入れているという。それを聞いて、今までやってきたことが生かせるのではないか、教えることが好きな自分に合っているのではないかと思って就職を決意しました。」

面接の時、彼は面接官の前でこう言った。「福祉の世界は何も知らないが、美術を学んできたからこそできるアプローチがあるはず」。美術を学んだ者が福祉の世界に飛び込むのは、初めてのケースだけに面接官は興味を示し、仮屋に言った。「大学で学んできたことを、この分野で生かしてほしい」と。

■ 教えることが好き、という気付き

教えることが好き。仮屋がそれを実感したのは、一つ上の先輩が立ち上げた「江古田なないろアートクラブ」での活動だった。現在は彼が代表を務めるこのサークルは、モノ作りを通して子供や地域とふれあうことを目的としており、他学科の学生のほか他大学の学生20名弱が参加。2ヶ月に一度のペースで児童館を借り、モノづくりを通して小学生とのふれあいを重ねている。

出会いの季節である4月は、将来の自分の名刺づくりを実施。大判の名刺に自分の名前と、将来なりたい職業の肩書と好きなもの、嫌いなものなどを書き、最後は名刺交換で締めくくった。その他、色セロハンを使ったステンドグラス作り、洗濯のりとビンでつくるスノードームなどいずれのプログラムも好評で、毎回、多くの子供たちが集まるそうである。目を輝かせて子供たちが何かを作る。そんな彼らの瞳の中に、仮屋は教える喜びを見出しているのだ。

子供に教えるという経験を、仮屋は高校の教育実習でも活用した。「ずっと版画を学んでいたので、その時は“彫刻刀を使わない版画もある”ことを教えるためにニスと絵具を使った木版画を教える授業を組み立て、先生にも褒めていただきました。」

■ 子供たちの背中を押す存在に

「絵が自分を作ってくれた」と仮屋は言う。「絵を学んでいなかったら、人に教えることが好きだと気付かなかっただし、障害をもつ子供たちに絵を教えることを思わなかった。絵を学ぶことによって自分が作られたように、これからは絵を通して障害をもつ子供たちの可能性を広げていきたいですね。」

児童館での経験や教育実習での経験を生かして、福祉の世界へ。進路の選択においては、母親の影響も大きかった。彼の母は看護・介護の仕事に従事し、事あるごとに職場での話をしてくれた。そんな母の存在が、彼の背中を押したのかもしれない。

就職は決まったものの、障害をもつ子供たちとまだ接したことがない。どんな子がいるのだろうか、自分のことを受け入れてくれるのだろうか…。母親から話を聞いていたとはいえ、不安がないといえば嘘になる。しかし彼には、福祉の世界で働いている「母」という強力なサポートがいる。そして2年間、福祉の勉強をしたその先に、本当にやりたかったことが待っている。

「絵や工作を教えることで、子供たちの背中を押したい」。美術を学んだからこそ掴むことできた新たな目標に向けて、仮屋は今、力強く歩き始める。



自分の作品を作るより、人のために何かを作ることが好き。そんな仮屋の趣味はTシャツ作り。イラストが可愛いと友人たちの間でも人気である。

2013

年度 日本大学芸術学部
芸術祭テーマ

第一





あなたのあなた、まだ五感止まりですか？

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、これらをまとめて五感といいます。

ここから派生した言葉に特別な力を持つ第六感という言葉があります。

今回のテーマ『第八感』は、
これらの感覚を超えた新しい感覚です。
何か作品を観たり聞いたり触ったりして何か思うことがあれば、それが『第八感』と定義しました。

『第八感』の八は、八学科に由来しています。

今回の芸術祭に来ていただいた方や関わった方、全ての方々に

この新しい『第八感』という感覚を発見してもらい、たいと考えています。

【開催日時】

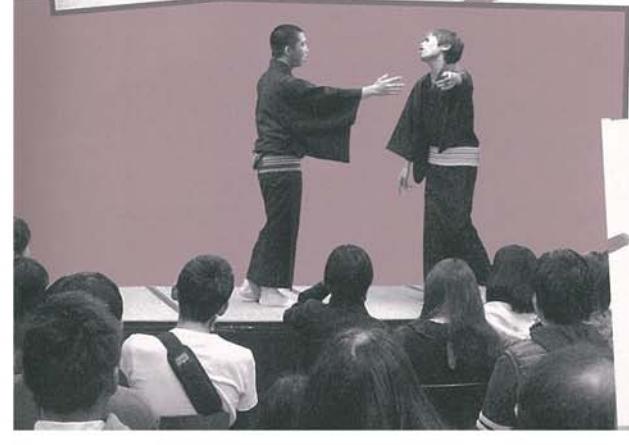
2013年11月2日、3日、4日

10時～19時（最終日大ホールのみ20時まで）

【開催場所】

日本大学芸術学部江古田校舎
東京都練馬区旭丘2-42-1

成

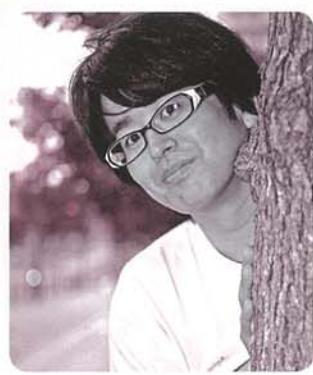


S

EISHUNの君たちへ

「食わず嫌い」嫌いであれ

内木滋雅 ○ 文芸学科 平成15年度卒



「若」い頃、もっと勉強しておけばよかった

皆さんも先生や御両親、年上の先輩から

一度は言われたことがある言葉だと思います。むしろ聞き飽きた言葉かもしれません。

「まさかここでもそんなおっさんくさいことを聞くのか?」と思った方、半分正解。たしかに私自身もおっさんという括りに片足突っ込んでるルーキーのおっさんですから、そう思うこともちょくちょくあります。ですが勉強というよりも、食わず嫌いせずに色々経験すればよかった、と思うことの方が多いです。

ちょうど今から13年ほど前、私が文芸学科へ入学した西暦2000年。この文章を読んでいる皆さんがまだ小学生かその前の年だった頃のことです。専攻していたゼミの先生から、夏休み中に「どこでもいいから旅に出なさい」という宿題が出ました。「旅、うーん、別に行ってもなあ……お金もなあ……」という感じで言い訳を思い浮かべながら、結局どこにも行かないまま所属していた部活動に精を出していました。

旅に出たくとも、社会人になった今は長い休みを取ることはなかなかできませんし(これも言い訳ですね)、ひたすら自分のやりたいことに打ち込むこともできません。何かを始めようにも同じようにたくさんの言い訳が身体を縛りつけ、どんどん腰は重くなるばかり。ふと気がつけばもう夜中、なんてこともしばしばです。

そんな時はいつも「迷ったらGO」と思って行動するようにしています。こんなバカバカしい決断方法だからこそ意外と腰が軽くなり、はじめの一歩を踏み出すことができるものです。そのおかげで昔の自分では想像できないような経験を、良くも悪くもしています。

どうか、学生当時の私のように、「どうせやってもなあ」と勝手に上限を引いて、やめてしまうことだけはしないでください。所詮引ける線なんて自分が経験した範囲内でしかありません。そりやつまらないと思うのは当然でしょう。

やらないで後悔も、やってからする後悔も同じ「後悔」ですが、やった後の後悔は真実味を帯びた「経験」になります。ちょっとした話も、精魂込めて作り出した作品も、リアリティがなければ成立しません。13年前、先生が伝えたかったことはこういうことだったのかもしれませんね。

迷ったらGOです。後悔も含めて、たくさんの経験を積み重ねていってください。

キミは、とっても、綺麗だよ。

石渡さくら ○ 放送学科 准教授



「S EISHUNの君たちへ」ってタイトルさ、なんか説教く

さくない? しかも、あー、あたし、歳取ったんだーとか思っちゃってちょっとヤな感じ…なんて、私の複雑な心中はさておき。お手紙とか書いちゃう? それもなんだかなー。でも、なんかいいこととかすぐったいしなー。じゃ、ま、なんかちょっとお手紙風、的な? メッセージみたいな感じ? だから何なんだよ、とか言われる前に、書いちゃお。

日々、学生を見ていて思うこと。綺麗だな、って。いろいろなものにぶつかったり、もがき苦しぇたりする姿を見ると、その姿がまた、ひときわ綺麗。自分が学生の頃、人生の先輩方から言われた。「一番いい時だね」って。誰だってそうだ。その言葉の本意を知るのはその時が過ぎてから。だから今のキミたちにはわからないのかもしれない。でも青春のキミたちは、とっても綺麗なんだ。

苦しい受験勉強を終えてやっと入った大学はなんか少し思っていたのと違う、とか。卒業までカウントダウンに入ったけど、やりたいことがみつかない、とか。芸祭前だっていうのに企画が決まらない、いや、その前に人間関係ぐぐぐ、とか。つぶやいたのに誰も絡んでこないとか、既読がついたのに返事が来ないとか…ってか俺にだけそのメッセ来てなくね? とか。キミたちの前には問題が山積み。いつもそれと戦っている。疲れたって思ったり、逃げたいって思ったり。でも、それなりに楽しかったりもする。こうしていろいろなものと向き合って、戦って、楽しんでいるキミたちは、何は無くても美しい。他愛の無い日常。でも、誰もがうらやむ時に、キミたちはいるんだ。

悩み、迷い、考えるキミたちの姿には、希望がある。ネガティブオーラに包まれていても、その先にある光が見える。必ずそこにたどり着ける、そう思わせる強さがある。ゆとり世代だなんだと言ったって、意外とキミたちは強い(「うたれ弱いんです~」とか言って、弱っちいフリしたってダメだよ)。だから、悩みなさい。迷いなさい。考えなさい。力一杯、苦しみなさい。そんなキミは、とっても、とっても、綺麗だよ。

なーんて。なんだかんだ言つていて説教系? ごめんごめん、軽く聞き流してよ。面と向かってはなかなか言えないからさ。あんまり気にしないで。ありがとね。なんだかわからぬいけど。またね。

野に咲く紅いバラ——ある日藝OBのこと

高久 晓 ○ 芸術教養課程 教授



Seishunの君たちへ、か…知り合った年長の日藝OBのことと書いてみようか。日本じゃなくて、台湾に住んでいた。今年4月に91歳で亡くなった台湾の長老作曲家、郭芝苑氏だ。

郭芝苑氏は1921年、台湾中部の町で生まれた。10代を東京で過ごして音楽に目覚め、作曲家を志した。1943年に日藝の音楽科に入学。当時の日藝はすでに江古田に校舎があつて、芸術を学びたい台湾や朝鮮半島や満州出身の学生も結構な数在籍していた。週に一度、松原寛(日藝の創設者)が全学科の学生を集めて行っていた授業が面白かったという。けれど日本も日藝も最も困難な時代だった。その年の12月には学徒動員。終戦とともに郭さん(「氏」はやめよう)は台湾に戻った。

郭さんの母国語は台湾語。日本語も完璧だったけれど、戦後の台湾では政治的事情で北京風の中国語が使えないとい教職に就けなかった。だから作曲に打ち込むしかなかった。1954年、郭さんは台湾人として初めてオーケストラ曲を作曲、以後の郭さんの経歴は「台湾人として初めて××を作曲」の連続だ。けれど作曲の基礎的な修行が満足にできなかったのが心残りだった。郭さんが日藝で師事した先生が、戦後東京藝大で日本の専門的な音楽理論教育に決定的な影響を与えた音楽教育者・作曲家、池内友次郎だったのは幸いだった。1960年代後半、池内は郭さんを最大に研究生として招いた。念願は達成された。

郭さんの作風は台湾国民党派とでも呼べるもので、どんな作品にも台湾の民俗色が息づいていた。精力的に作曲を続ける郭さんは「野に咲く紅いバラ」と呼ばれた。ヒットした歌曲のタイトルのものじりだ。晩年は褒賞にも恵まれたけれど、「私の作品が私の地位である」と恬淡としていた。

郭さんと知り合ったのは15年ほど前。初めは散発的に日本の音楽事情を知らせていたけれど、やがて定期的な文通となり、近年は毎年会いに出かけていた。私もいつか郭さんの持続力に影響されていた。作曲への意欲や音楽への好奇心が衰えなかつたのは目を見張られた。昨年も新作の室内樂を作曲していたし、最後に会った今年2月末には、仕事場に昔書いたオーケストラ曲の分厚いスコアが広げてあって、なお改訂すべき箇所を探していた。

このところ、もらった手紙を整理して読み直している。本当にいろんなことを教わったように思う。みなさんも幸運な出会いに恵まれますように!

ずっと続いていること

八田京子 ○ 所沢校舎庶務課(図書館)課長補佐



S生のころからずっと続けてきていることが2つある。1つはいろいろなLIVEに行くこと、ジャンルも様々で参加する所もいろいろである。ポップスやジャズであったり、ミュージカルをNYで観たり、モーツアルトコンサートをウイーンで鑑賞したり、場所も時期も関係なく機会があれば足を運ぶ。勿論回数は少ないが、演劇などの舞台へも足を運ぶ、所謂LIVE好きである。

芸術学部の在学生にとって、何を今更と言わせそうだが、LIVEの魅力は、その時その会場、劇場で、その瞬間の歌手や演者の声や動きは二度と同じではない、観る側の観客にとっても全く同じ感動を二度と味わえないということである。その瞬間を味わいたくて同じ公演でも、また足を運んでしまうのである。

もう1つずっと続いていることは、博物館や美術館に行くことで、若い時に「今は分からなくても、いつか良いものが分かるようになる」と信じて行き始めた。では今、分かったかと言うとまだ観足りていないようである。

以前、真夏に上野の美術館や博物館をはしごして、エアコンが効いていたため風邪をひいてしまったことがある。残念ながら最近は、美術館をはしごする程の体力はなくなってしまったが、相変わらず出かけている。ルーブル、オルセー、大英博物館、テートギャラリー、ウイーンオーストリアギャラリー、MOMAと機会があれば行くことにしてる。

いつも思うことは、LIVEと同様に、どの作品も二度と観ることが出来ないかもしれないということである。実際に遠い所の美術館へ再び行くのは難しいことだと年齢を重ねてみて実感している。

若い時にロンドンで好きな作品に出会えた。いつかまた観に来ることが出来るだろうと思っていたが、その作品に再び出会えたのは何と18年後であった。その作品を含む美術館の展示が日本であり、再び会うことが出来て非常に感激したのを覚えている。なんと言うか愛しい人にやっと出会えたという感覚である。

私の場合はLIVEや好きな絵画を観ることで癒されて疲れが飛んでいき本当に元気づけられる。時にはどんな薬よりも効果がある。

皆さんが将来、仕事などで身体や精神が疲れた時に、好きなことを続けることは自分にとっての栄養剤がわりにもなるので是非やり続けてほしいと思う。

また在学生の皆さんにはいずれ、音楽、映画、演劇や絵画などの創り手となって、それを観る人聴く人を、時には元気にしたり、感動を与えられる栄養剤のような作品を作り出して欲しいと思っている。

1つのハート

Meet the Artsとは



25年度から開始したプロジェクトです。今年は初年度ですので主に練馬区を中心として行っています。

『Meet the Arts』とは、日本大学芸術学部の8学科（写真学科、映画学科、美術学科、音楽学科、文芸学科、演劇学科、放送学科、デザイン学科）をはじめとする教員が、それぞれの専門分野から芸術の理解を深めてもらうことを目的として、小中学生・高校生を対象としてボランティアで出張授業を行う平成

映画学科教授 烏山正晴

Meet the Artsの出張授業報告

5月31日（金）、練馬区開進第三小学校に出張授業で伺いました。95名の小学校5年生を対象に「日本の伝統音楽を理解しよう」というテーマで、邦楽の歴史および楽器についての説明や尺八の演奏を行いました。当日は、助手の野沢真実子さんにピアノ伴奏をお願いし、久石譲作曲「崖の上のポニョ」、日本古謡「さくらさくら」、宮城道雄作曲「春の海」の3曲を演奏。生徒の皆さんを始め教員と保護者の方々も、ピアノと尺八が奏でるメロディをとても楽しそうに聴いてくださいました。特に「崖の上のポニョ」はよく知られている作品なので、生徒達が目を輝かせて、時には演奏に合わせて口ずさみながら聴き入ってくれた姿が印象に残っています。

最初は邦楽器に興味を持ってもらえるのが不安もありましたが、楽器の歴史、楽譜等の説明を一言一言聞いて熱心にメモをとったり、とても嬉しそうな表情を浮かべたりして授業を受けてくれました。「尺八が好きになった。吹けるようになりたい」「音楽が好きではなかったが、好きになった」「大学のことがわかった」等、たくさんの手書きの感想文を頂き、生徒達に大きな感動を与えられたことを嬉しく思います。また、学校教育の音楽の授業に邦楽器が導入された現在、今回の様な機会も益々増え、日本音楽の良さを生徒達に伝えていければと思いました。

音楽学科教授 加藤 明

FOCUS IN 2013

日藝で映画を学んでいた頃、授業でも授業じゃなくても仲間で集まって映画ばかり創っていた。ちゃんとシナリオを準備して撮影するものもあれば、その場の勢いで休み時間に撮るものもあった。素敵なものもあれば、くだらないものも多々あった。そんな作品が集まって芸祭では必ず上映会をやった。「創ったからには観てもらう!!」これが暗黙のスローガンで、声を枯らして呼び込みをした。一人でも多くの人に観てもらいたくて、会場に対して明らかに多過ぎる人を詰め込んでしまったりもした。「創ったからには観てもらう!!」欲求はどんどん高まり、キャンバスを飛び出し映画館へ。どういう経緯が忘れてしまったが、渋谷のシネクイントや入間のユナイテッドシネマで上映会をやった。余談だが、この集団がいつの間にかサークルになった。それが【ズッキーニ】である。数年前、教員として大学に戻った時、【ズッキーニ】が存続していることに腰が抜けそうになった。とにかく、大学時代を通じて、創ったものを観てもらう喜びを知った。

卒業後のある時期、映画館で働いてみた。池袋の一番賑やかな界隈にあるものの、シネコン化の波に乗り遅れた、良く言えばレトロ、悪く言えばオンボロな映画館だった。もちろん座席指定などというハイテクシステムは無かった。しかしこの映画館、今思えばなかなか良い映画を封切っていた。岩井俊二監督『花とアリス』、矢口史靖監督『スwing・ガールズ』、中島哲也監督『下妻物語』などなど。時にお客さんは数時間列に並び、立ち見である事も厭わず映画を観ていった。3年間近く働いた中で、お客様が0人だった事は1度も無かった。毎回、その時やっている映画を誰かが観に来てくれた。思わずどこかへ行きたくなるような休日の朝に、映画を観に来てくれる人が必ずいた。映画館でのアルバイトを通じて、映画に期待する人々の想いを知った。いい加減に、映画は創れないと思った。

さて、本題に入る。皆さんは【FOCUS IN】をご存知だろうか？

【FOCUS IN】とは、映画学科〈監督コース〉〈撮影・録音コース〉〈演技コース〉の3年生と4年生が実習で制作した作品の上映会である。

映画学科では毎年、この3コースの学生によって約70本の映画が作られる。作品は広く一般的の観客にむけて制作することが前提であり、制作者はその作品に込めた想いを老弱男女様々な人々に伝えられるか、はたまた無防備な一般観客の鑑賞に堪え得る作品であるかモラルの面からも表現者としての意識を問われることとなる。4年生は大学での集大成、創作者として



社会へ飛び出す第1歩とするべく卒業制作を作り上げる。3年生は、1~2年生の基礎過程を経て、企画立案から完成まで初めて自分たち主導で行う作品制作に、それまで溜め込み温め続けてきた想いを爆発させる。そんな、濃い映画ばかり約80本を1週間に渡って上映する年に1度のイベントが【FOCUS IN】なのである。

近年は6月末に開催されることが多く、前年度に制作された実習作品すべてが上映される。運営は、その年の3年生有志が中心となって担当している。3年生は自分たちの制作を本格的に始める前に先輩たちの作品の上映会を行い、制作者の想いと観客の想いを体感する事になる。

今年、『FOCUS IN 2013』は、『映画のじかんです。』をキャッチコピーに6月24日(月)~30日(日)に日本大学芸術学部江古田校舎東棟地下1階EB-2を会場に開催された。平日は授業後の18時~21時、土日はお昼前後の時間からスケジュールが組まれた。上映作品の制作者、出演者などの関係者はもちろん、学科学年を問わず芸術学部の学生、受験を考える高校生、映画館でチラシを見て来場して下さった方々、インターネットから情報を知った方々、毎年新年度になるとFOCUS INのスケジュールを問い合わせて下さり開催期間は毎日いらっしゃる常連のお客さんにもしっかりご来場頂き、昨年度を上回る来場者数のべ868名を数える結果となつた。近年は少しづつではあるが右肩上がりに来場者数を増やしているので、動員1000名を超える日もそう遠くないかもしれません。

また余談だが、【FOCUS IN】、googleで翻訳してみたところ【焦点を合わせる】と訳された。知った時には既にこの名前が定着していたので、いつ誰によって命名されたのか解らない。でも、いいネーミングだと思う。

今年度も学生たちは映画を創っている。安産な映画など無いように思う。どの映画も試行錯誤と一進一退を繰り返しながら“今”生み出されようとしている。そして、難産の果てにやっと産み落とされた映画は、恐らく来年の6月ごろ(決まっている訳ではないが)に皆さんの目に触れる機会を得るはずである。その時は是非【FOCUS IN】して頂きたい!!

映画学科助教 清水和貴



活躍する
出身者*

自衛隊で歌っています

三宅由佳莉 | Yukari Miyake Profile

1986年 岡山県生まれ
2009年 日本大学芸術学部音楽学科卒業後、海上自衛隊入隊



全国23万人の自衛官の中で、現在唯一のボーカリストとして活躍中の三宅由佳莉さん。東日本大震災を受けて作られた曲「祈り～a Prayer～」がYoutubeで注目を集め、8月に発売されたアルバムがオリコン・ティークリー・チャートでクラシック部門1位、総合部門で18位を獲得。「小さいころから歌が好きで、地元の合唱団に入っていた」という三宅さんは、高校2年生から声楽を学び始め、2005年に日本大学芸術学部音楽学科に入学。日藝を選んだのは「音楽以外の芸術にも触れてみたかった」から。学科の枠を超えてコミュニケーションが取れるカリキュラムに魅力を感じたそう。在学中は他学科の学生と一緒にミュージカルを上演することもあり、剛柔流空手道部にも所属。負けん気が強く努力家で、学業と厳しい部活動を両立させ学生リーグや流派全国大会などで多数入賞。身体が柔らかくとても綺麗な型を打つことでも知られ、明るく活発なムードメーカーとして4年次には副将として部を牽引した。



震災直後の2011年4月、三宅さんが所属する東京音楽隊は6~7名で被災地に赴き、避難中だった20~30人の前で演奏活動を行った。「曲を聴いて涙を流される方を見て、被災地はもちろんのこと全国各地で歌い、想いを届けたい」と考えるようになった。今年9月24日には「NHK歌謡コンサート」に出演。今後の活躍が益々期待される。



学長特別
研究**

○日本大学N.国際救助隊○

国際救助隊は、災害対策や復興支援に貢献し、日本大学の研究・教育活動を遠隔地で実践できるスマートモビリティシステムです。全国各地でさまざまなプログラムを社会実験することで、社会貢献、教育支援のみならず、災害時の復興支援に活用できる大規模な社会還元プロジェクトです。

○日本大学学長特別研究

ホームページ アドレス <http://n.rescue.nua.jp/>

Facebook アドレス <http://www.facebook.com/N.Rescue>

プログラムのお問合せ先 n_rescue@nihon-u.ac.jp



国際救助隊
NIHON UNIVERSITY N.RESCUE

写真学科**◎ニコンサロンbis新宿「出て來い新人2」展開催**

7月2日～8日、3年次作品より選抜された4年生12名による気鋭学生写真展として開催され、多くの入場者を集めました。

◎写真機材展開催

7月17日・18日、新校舎建設に伴い中止していた写真機材展を12社の専門機材・用品社の出展協力をいただき東棟2F学生ホールで開催しました。

◎写真甲子園2013・東川フォトフェスタ サポート

「写真の町」北海道東川町で開催された写真甲子園本戦バックアップ、及び東川フォトフェスタでのレビュー講師や思い出写真館「Niji」への指導・サポートを写真学科教員が行いました。(8月5日～12日)また本年度は会期中写真甲子園OB/OGである写真学科3年生3名がインターンシップの研修先として併せてバックアップをしました。

◎夏季ワークショップ・研修会・写真教室各種を開催しました。

○第13回「高校生のためにワークショップ」 江古田校舎 7月27日・28日(埼玉・栃木・群馬・茨城・千葉・東京・神奈川・山梨各都県の高等学校文化連盟後援)

○埼玉県高等学校文化連盟写真専門部 技術講習会 8月3日 所沢校舎

○埼玉県立芸術総合高等学校 学外学修 8月20日～23日

○茨城県高等学校文化連盟写真部会 顧問研修会 8月24日・25日 江古田校舎

○茨城県高等学校文化連盟写真部会 摄影研修会 大規模撮影会指導のため写真学科専任教員・助手が10名参加しました。(高校生約350名参加)

那珂湊漁港・大洗水族館 8月27日

○千葉県高等学校文化連盟写真専門部 生徒撮影研修会 (高校生約85名参加) 9月29日 江古田校舎

○芸術資料館企画展 Before Digital—制作技法の変遷から見た写真史 10月22日～11月8日開催(学部祭期間開催)

◎平成24年度卒業・修了制作優秀作品展開催

H26年1月まで、江古田校舎東棟1F写真ギャラリーにて順次展示中です。

◎「日本大学芸術学部写真学科2014卒展・「選抜展」を開催します。

2月17日～3月1日まで平成25年度卒業生による作品展が、江古田校舎西棟芸術資料館、3月8日～10日に新宿ニコンサロンbisにて開催されます。また、選抜展も3月6日～12日までポートレートギャラリー(四ツ谷)で併せて開催されます。

映画学科**◎映画祭「監督・映画は学べますか?」開催**

12月14日～20日、会場オーディトリウム渋谷にて、理論・評論コースの3年生による映画祭企画が開催されます。今回は、大学や専門学校で映画を学ぶ・教える意味を、実際に大学や専門学校で学んだ監督とのトークショーの中でお聞きします。現在作品の上映が決定している監督は、沖田修一監督、想田和弘監督、富永昌敬監督、松江哲明監督、山村浩二監督、横浜聰子監督です。

◎第17回水戸短編映画祭グランプリ「猿たちの舟」、水戸市長賞(準グランプリ)「よいお年」を

第17回水戸短編映画祭で、昨年度の卒業制作の2本が同時受賞しました。尚、「よいお年」は映文連アワード2013パーソナル・コミュニケーション部門の優秀賞も受賞しています。

◎下北沢映画祭グランプリ「京太の放課後」

上倉泉教授がミキサーを担当した「京太の放課後」が、下北沢映画祭でグランプリを受賞しました。尚、この作品は、札幌国際短編映画祭、グアム国際映画祭、小津安二郎記念夢科映画祭、ハワイ国際映画祭などで正式上映されました。

◎カンヌ映画祭ショートフィルムコーナーにて上映

上倉泉教授がミキサーを担当した「旅するボール」がカンヌ映画祭ショートフィルムコーナーを始め、水戸映画祭、仙台短編映画祭、ショートショート・フィルムフェスティバル・メキシコ、高雄映画祭(台湾)など、世界各国で正式上映されました。

◎11th International Festival Signs de Nuitにて上映

奥野邦利教授によるビデオアート作品『記憶のかたち』が、フランス パリにて開催された11th International Festival Signs de Nuitで正式上映されました。尚、この作品でも上倉泉教授はミキサーを担当しています。

◎CASIOオフィシャルチャンネルで公開

野村達也助手が制作した動画が、YouTubeのCASIOオフィシャルチャンネルで公開されました。デジタルカメラEXILIMのタイムラプス機能を使用しています。作品タイトル『"Tick tick tick!" Summer time Diary』で検索すると見ることができます。

◎ISMIE2013開催

映画学科が幹事校となっているインターリンク学生映像作品展2013が10月25日～27日、新宿三井ビル55スクエアにて開催されました。全国から集まつた22校の映像メディア系大学及び専門学校の学生作品が上映され、学生や教員の交流の場となりました。

◎J:COMチャンネルの「日暮アワー」にて放映

映画学科の授業内で制作された学生作品がJ:COMチャンネルの「日暮アワー」にて放映されています。放映時間等詳細はJ:COMホームページ「MY J:COM」にてご確認ください。

美術学科**◎各種展覧会のお知らせ**

○鞍掛純一個展

11月2日～12月22日 Plaza Gallery

○松本 隆個展(彫刻コース非常勤講師)

11月2日～24日 Plaza Gallery

○長谷川佐知子個展(彫刻コース非常勤講師)

11月30日～12月22日 Plaza Gallery

東京都調布市仙川町1-24-1 10:00～18:30 水曜定休

○雨引の里と彫刻 2013

大槻孝之教授 海嶌三郎非常勤講師

佐藤 見非常勤講師 和田政幸卒業生が出品

9月22日～11月24日 9:00～17:00 茨城県桜川市

○潤口達也個展(卒業生)

「PANTA RHEI —すべては自然の循環の中に—」

11月2日～24日 Plaza Gallery 南バティオ

○関口 茂る個展(卒業生) 「ニルバーナヘノミシルベ」

11月30日～12月22日 Plaza Gallery 104 ギャラリー

○富井大裕助教 出品 「MOT COLLECTION」

10月3日～1月19日 10:00～18:00 東京都現代美術館

音楽学科

平成25年度音楽学科主催演奏会は、次の通りです。い

ずれも入場無料ですので、お気軽にご来場ください。ただし第112回定期演奏会は全席指定ですので、座席整理券が必要となります。詳しくは音楽学科までお問い合わせください。

○第44回オペラ公演 〈練馬文化センター小ホール〉

11月6日 18:00開場／18:30開演

○第41回フルカリティーコンサート

11月9日 18:00開場／18:30開演

〈芸術学部音楽小ホール〉 音楽学科の教員による演奏会

○第49回室内楽の夕べ

11月13日 17:30開場／18:00開演

〈所沢市民文化センターミューズ・キューブホール〉

○第25回ウンドオーケストラ定期演奏会

11月19日 18:00開場／18:30開演

〈練馬文化センター大ホール〉

○第42回ピアノコンサート 〈練馬文化センター小ホール〉

11月25日 15:00開場／15:30開演

○第112回定期演奏会

12月13日 17:30開場／18:30開演

〈東京芸術劇場コサートホール〉

○第34回新作室内樂の会

12月20日 17:30開場／18:00開演

〈芸術学部音楽小ホール〉 提出作品より選抜された演奏会

○大学院修了演奏審査会 [声楽・ピアノ]

12月18日 声楽:11:00開演 ピアノ:15:00開演

〈芸術学部音楽小ホール〉

○大学院修了演奏審査会 [弦楽・管楽]

12月19日 13:00開演 〈芸術学部音楽小ホール〉

○平成25年度大学院修了演奏会

平成26年3月13日 開場／開演時刻未定

〈練馬文化センター小ホール〉

○平成25年度卒業論文要旨発表会

平成26年3月20日 開場／開演時刻未定

〈芸術学部音楽小ホール〉

卒業論文が優れていた学生による論文発表

○平成25年度卒業演奏会

平成26年3月20日 開場／開演時刻未定

〈練馬文化センター小ホール〉

卒業演奏審査会において優秀であった学生の演奏会

○SWITCH 2014

3月21・22日 芸術学部音楽学科

文芸学科**◎「第24回伊藤園お~いお茶新俳句大賞」に入選**

165万211句の応募の中から、以下6名の文芸学科生の作品が佳作に選ばれました。

夕立を聞きながらた鶴を折り 小沼 理(4年)

酉の市蠍扇の役者と袖ふれ合い 加藤 静(4年)

食卓の木目なぞりてゆる声 宮崎 綾(4年)

早梅を隠し通せぬ良き日かな 笠原早有実(卒業生)

さよならを伝えず帰りキヤベツ割る 永沼絵莉子(3年)

どうしたの何を焦るのソーダ水 鈴木日向子(2年)

◎「江古田文学」編集長に佐藤洋二郎教授が就任

「江古田文学」の編集長に佐藤洋二郎教授が新たに就任しました。83号から表紙も一新してのスタートです。ご期待ください。

◎第29回大文芸賞に選ばれました。

第29回大文芸賞に以下の文芸学科生が入選しました。

優秀賞 「東京シチュー」 大西由益(4年)

佳作 「say PaPa」 小黒貴之(文芸学専攻修了)

「うみ日和」 御手洗紀徳(文芸学専攻2年)

演劇学科

本年度も残りわずかとなりましたが、江古田、所沢両校舎の公演と、卒業制作発表を控え、日々稽古は続いております。

一年の締めくくりに、舞台鑑賞はいかがでしょうか?ぜひ、

日々の成果を、また4年間の集大成をご覧ください。秋に行われた公演とこれから行われる公演は下記の通りです。

◎総合実習I(2年生)

会場: 所沢校舎アートセンター・ブラックボックス

○【洋舞】「Modern Dance Performance」

創舞指導: 加藤みや子/松永雅彦 11月22・23日

○【日舞】「またとモチモチの木(仮)」

創舞指導: 藤間恵都子 12月7日

○【舞台総合実習IVA(3年生)

会場: 江古田校舎北棟中ホール

○【演劇】「アルゴス坂の白い家」

作・演出: 川村 育 11月29日～12月1日

卒業制作

会場: 江古田校舎北棟中ホール

○【演劇】「飛龍伝」

作: つかこうへい／演出: 岩澤哲野 11月14～16日

○【洋舞】「Modern Dance Performance」</